

## 交流と対話を通じた大学間の協同・連携を考える（２）

－2009 年武漢・上海訪問交流研修－

Gehrtz-三隅友子

金成海

Gehrtz-Misumi, Tomoko

Jin, Cheng-Hai

徳島大学国際センター

### 要旨：

国際センターは、2009 年 3 月の 8 日間、徳島大学の学部生 12 名と引率教員 2 名（筆者の金及び Gehrtz-三隅）によって武漢・上海訪問交流研修を実施した。訪問先は本学の協定校である武漢大学と本学卒業生が日本語教員として勤務する東華大学（上海）及び上海財経大学であり、各大学の日本語学科の学生と交流を行った。研修の目的は、①日本語を学ぶ中国人学生とのコミュニケーションを通して友達になること②中国を訪問し実際に異文化を体験し理解すること、そして参加者が各自の自由に目的を立てそれを実践することであった。中国での交流会に備えて中国語会話（自己紹介と簡単な会話）と中国語の歌を本学の留学生の指導により練習し、同時にコミュニケーションのトレーニングから日本語劇「ひのきとひなげし（宮澤賢治作）」を準備した。三大学との交流研修修了後のレポートさらに約 1 年後（2010 年 2 月）の参加者からのコメントをもとに本研修を振り返る。参加者の気づきや学びを確認することによって、これからの訪問研修の意義や可能性を考える。

キーワード：交流、演劇、異文化理解、コミュニケーション、日本語

### 1. はじめに

国際センターは、その業務として留学生の受け入れ支援等の業務と留学生教育（日本語教育、相談・指導支援）また日本人学生の海外留学を支援する活動を行っている（注 1）。この日本人学生への支援活動として、2009 年 3 月 8 日から 15 日の日程で武漢・上海訪問交流研修を実施した。日本人学生を指直接導する機会が少ない国際センターが中心となり、中国語（全学共通教育センター）及び総合科学部の教員と協力して本研修旅行を企画し実施にいたった。また訪問先の三大学の教員との連携も必須であった。学内での事前研修から中国での交流活動と見学を中心とした 8 日間は、参加者及び実施者に何をもたらしたのか、本稿では研修を振り返るとともに、日本人学生に対する「国際化」への働きかけとして今後の取り組みを考察する。

### 2. 研修の概要

#### 2.1 背景

日本人学生の海外留学は、二つに分けられる。学部学生が語学学習を目的とし海外の大学の語学センター等で学ぶものと、専門分野の研究を進めるため特定の学科や指導教官のもとに入るものである。徳島大学では受け入れる留学生は多く、一方で送り出す日本人学生の数が少ないというアンバランスな状況が続いている。留学による留年の可能性や本学学生の語学力不足等からの理由も考えられる。提携大学との関係を含め、真の国際化を考える際には、やは

り日本人学生への留学を支援することが必要となろう。長期の留学を決意する以前に徳島大学の学生が異文化に触れる機会は非常に少ない。語学を担当する教員からもまた学生からも短期で安心して外国文化に触れる機会を設定してほしいという要望を受け、今回の訪問研修を企画した。これまでには、2006 年 3 月の武漢大学研修を、2007 年 10 月には武漢大学から徳島大学への訪問研修を実施しており、特に武漢大学とは訪問研修の実績がある（注 2）。さらに、2008 年 11 月には本学の留学生同窓会が上海で開催され、協定大学以外に卒業生が勤める大学との交流の可能性もあったことが加えられ、武漢と上海という二ヶ所が訪問先となった。

#### 2.2 目的

協定校の武漢大学及び卒業生が日本語学科の教員である東華大学及び上海財経大学を訪問し、日本語学科の学生と交流することと、中国（武漢と上海）という異文化を実際に体験することであった。また各自の目的もそれぞれに明確にして臨むことを課した。よりよい交流を図るために、事前研修として①中国語会話②中国語の歌（朋友）③日本語劇の三つを練習した。

#### 2.3 参加者・関係者

○徳島大学

日本人学生は総合科学部 1 年 5 名、2 年 6 名、3 年 1 名の 12 名、引率教員 2 名

○武漢大学 日本語学科学生 1-4 年

- 東華大学 日本語学科学生 2年
- 上海財経大学 日本語学科学生 1-4年

## 2.4 研修に至るまでの流れ

2006年から今回に至るまでは資料1を参照のこと。

## 3. 準備期間及び事前研修に関して

### 3.1 経緯

2008年度の国際センターの活動として参加学生への奨学金（補助金として10名分）を国際教育研究交流資金より獲得した。さらに11月には、全学共通教育の中国語の授業の際、各担当教員から本研修旅行への参加を呼びかけた。1月めでに12名の応募があり旅行参加者を決定した。全員が総合科学部の学生ではあったが、中国語を学んだことの無い者も含まれていたため、ビザ等の準備とともに参加者の連帯感を作るためにも事前研修を行った。

### 3.2 中国語

中国語会話は、自己紹介を中心として挨拶と買い物のことばそして数字といったごく基本的なことを学習した。当時武漢大学から交換留学生として来日していた二人の学生に指導を依頼した。また交流会で中国人学生と中国語で歌える歌として「朋友」を選び歌唱指導もお願いした。2月の19日から出発直前の3月3日までに3回、各3時間ずつ計9時間行った。

### 3.3 演劇

さらにコミュニケーショントレーニングとして外部講師に依頼し、身体的コミュニケーション（こえとからだとかかわりを互いに体験学習する）（注3）から、日本語学科の学生に披露するための演劇練習を行った。この目的は、上述のように募集した学生に一つのものを作るという連帯感を持ってもらうこと、さらに言語以外の表現の方法を認識し、自分のコミュニケーションをもう一度振り返ってもらうことの二つであった。

この研修には、日本語研修コース（集中的に日本語を学ぶ）の初級留学生にも参加を促し、いろいろな国の人と接して身体ほぐしを行うことも体験してもらった。これは2月13-15日の3日間の9時～5時まで計20時間実施した。その後、出発までに歌と数回の演劇の練習を行った。

### 3.4 事前研修の評価

中国語と歌は別にして、アンケートからは中

国に行くためにどうしてこんなことをするのかという疑問がわいた者や、都合がつかず全部に参加できずに消化不良を起こした者もいたようである。大学の授業では体験しない内容であったことから戸惑ったことが読み取れる。満足度に関しては、「普通」とした三人の「劇の練習は楽しかった。少しずつ人と上手く接せればよいと思った」「初めてだったのでまだなじめずついていくのに必死だったから」「最初は何か新しいことをやっているようで楽しかったけどだんだんよくわからなくなってきました」、理由からも困惑さがうかがえる。

印象に残ったことや最後の感想から、各自がそれぞれのコメントを寄せている。普段の身体が非常に緊張した状態にあること、自分の声の出し方を客観的に見つめることができたこと、他者との接触や距離感がコミュニケーションにとって重要であること、さらに全身を使って表現する劇を体験したことである。

## 4. 訪問研修—中国にて

2009年3月8日～15日（8日間）の日程等の詳細は資料2を参照のこと。

海外旅行が初めての学生がほとんどで非常に緊張していたことが伺えた。武漢大学到着までに、忘れ物等の小さいトラブルも起こったが、武漢大学の先生方と学生の空港での出迎えが緊張をほぐした。夜の交流会に続き翌日の日本語授業参加と交流会での演劇上演そして互いの出し物の披露で交流が深まっていった。3日目は本学学生の希望により3つのグループに分かれて市内見学を実施した。学生同士の視点で同じものを見て意見を交わす貴重な体験であった。武漢大学の学生は最後まできちんと対応し宿舍まで送り届けてくれた。翌日はお世話になった2年生の日本語授業にて12名が別れの挨拶をした、その際全員が涙ぐんだときには引率の教員も驚いた。この中には2009年10月から来日する交換留学生も参加していた。

その後上海に移動してホテル到着後、東華大学の学生が上海市内を案内してくれた。武漢とは違った都会の様子に驚き、またより注意して行動しなければならないことが促された。翌日は、郊外の広大なキャンパス見学と再び交流会を実施した。日本語劇は2回目となり自信を持った態度で演じられた。また要望により阿波踊りも披露した。夜は豫園をやはりグループに分かれて、東華大学の学生に案内をお願いした。

6日目には上海市内の財経大学を訪問し、1年生から4年生の有志との交流会を実施した。中国語の自己紹介も上手になり、中国人の学生

から拍手をもらえた。この夜は雑技団見学、翌日は一日上海市内見学を財経大学の学生と教員に案内をお願いした。

いずれの大学も交換会での挨拶や全体スケジュールの調整等から公式の訪問客として受け入れてくださったことが、大学を代表してきているという意識を確認させたように思えた。

8 日間で3つの大学との交流はかなりスケジュール的に厳しかったが、学生同士がおしゃべりをしながらの見学そして買い物といった交流ができた。上海から関西空港へそして徳島に無事到着し 15 日に研修旅行を終了することができた。

## 5. 研修を終えて

### 5.1 報告書から (2009 年 3 月)

帰国後 3 月中に感想文を課し内部資料として報告書を作成している (2009 年 4 月)。研修を終えての自由な感想と一枚の写真を A4 サイズに収めたレポート集である。12 名のそれぞれの思いや気づきが記されているが、以下にまとめた。

#### 「研修を終えて」

- 1 中国の学生の対応に深く感謝する
  - 2 反日感情に対する不安がなくなった
  - 3 中国に対する危険なイメージがなくなった
  - 4 中国人の友達ができた
  - 5 留学したい気持ちになった
  - 6 日本のよさを確認した
  - 7 中国人学生の日本語力 (能力) の高さ
  - 8 もっと中国語を勉強して話したい
  - 9 自分を伝える方法について考えた
  - 10 帰国後、周囲の人に報道からではない自分のイメージを伝えることができた
  - 11 日本と中国の経済関係やこれからについて考えた
- (2009 年 4 月報告書より、筆者が抜粋)

以上のように感想文からはそれぞれの気づきがあったことがうかがえる。また選ばれた写真の多くは一番親しくなった学生との笑顔のものであった。

### 5.2 訪問大学の学生から (上海財経大学)

帰国後、財経大学から送られた 7 名 (1 年生 5 名 4 年生 2 名) の学生のコメントを資料 3 に原文のまま掲示する。

歌と劇と会話による交流が楽しかったことや日本語を学ぶ学生にも刺激があったことがうかがえる。

### 5.3 1 年を経過して (2010 年 2 月参加者)

研修後、学生サポーターとして国際センターの事業に参加する学生もいるが、接触は多くなく 1 年を経過しての自由な感想をメールにて依頼した。現在留学中の 1 名をのぞいて 11 名からは次のような意見があった。

#### 「中国へ行って今思うこと」

- ・ 行ってよかった = 全員  
日本では出来ない体験・もっと中国や中国人と付き合いたい・中国が身近になった
  - ・ 4 月からの留学予定している = 1 名
  - ・ 語学学習に関しての意欲が出た、学習方法を考えるようになった
  - ・ 自信を持って一步を踏み出す勇気を得た
  - ・ 挑戦することが大事
  - ・ メディア報道より目で確かめたい
  - ・ 本格的な留学以外に海外に行く機会がやはりほしい
  - ・ 学内でももっと留学生との交流をしたい
- (2010 年 2 月感想より、筆者が抜粋)

また現在留学中の学生は次のように述べている。

「中国武漢・上海への研修旅行から 1 年が経とうとしている。研修旅行の半年後、私は訪問した武漢大学で留学することになった。去年の 3 月に訪問し、日本語学科の学生たちと交流したことは今でも記憶に新しい。9 月から留学すると決まった時、その交流で知り合った友人たちにまた会えるという楽しさと、その時見ることのできなかつた武漢の街並みや大学内が、また見られるという楽しみが大きかった。実際約半年ぶりに再会し話をしたときは、半年前には分からなかったことや、時間の関係で聞けなかったことをたくさん聞くことができた。また、その友人を通じて新たな友人と知り合うこともでき、もし研修旅行で知り合うことができていなかったら経験できていなかったであろうことが多くあった。武漢大学内も時間の関係で見られなかった場所なども案内してもらい、改めて勉強する環境が整っていると感じた。自習室がいくつもあって、いつ行っても席がほとんど埋まっており、その光景を見るたび中国の学生がどれほど勉強に対して熱心か実感させられる。

私が留学先を武漢大学に選んだのは徳島大学と協定校ということもあったが、一度訪れたことがあり知り合いがいるからという理由もあった。中でも研修旅行で知り合えた一人の学生は 3 月に武漢の空港で別れる際、その時はなぜだか分からなかったがこの人とはまた必ず会えるよ

うな気がしていたことを覚えている。実際数ヵ月後に留学が決まり、あの時感じたことは気のせいではなかったと思い大変うれしく思った。

もともと留学希望のあった私だったがこの研修旅行でさらに留学したいという気持ちが大きくなり、結果的に留学できることとなった。もし参加していなければここまで気持ちが大きくなることはなかったと思うし、武漢大学に留学することはなかったかもしれない。その点でも研修旅行に参加してよかったと心から感じている。」

#### 5.4 研修を振り返って（教員）

今回の研修を共に企画、学生の募集さらに旅行社及びパスポートの手配等の雑務を一手に引き受けてくださった学部教員の一人にコメントをお願いした。

「語学を学んでもそれが何の意味を持つのか今一つ実感がわからない、これが大方の学生の率直な感想だろう。これに対して徳島と武漢大学の学生が相互に訪問した意味は大きかったと思われる。まず彼ら自身がはじめてその語学能力が実際に生かされる機会を得たこと、異なる文化を実感したことが挙げられる。帰国後何人かは中国へ長期留学や将来的に中国関係の仕事に就くことを希望するようになった。加えて彼ら自身がクラスの中で生き生きとした姿を見せることにより、『来年は自分も行ってみよう』と他の学生が思うようになったのは、思わぬ副産物であった。近年は学生の『何となく外国嫌い』が増えているように見受けられるが、実際の交流が取り持たれることで、そのような思い込みはあつという間に消えてしまうのである。今後とも同年代の若者同士がふれあう機会を提供することは、両校のみならず両国にとっても意義深い。国際センターのご尽力に感謝するとともに、これからも同様の企画が続けられることを切に願う。」

#### 6. 考察（今後の課題）

現段階で課題と思われる点を以下に挙げる。

##### ① さらなる学生の能力開発

短期であれ中国語練習や対話の際の学生の取り組みに対する意欲が感じられた。今回は日本語による交流が主であったが、今後は学んだ外国語がよりコミュニケーションや自己表現につながるような教育体制の整備が必要である。

##### ② プログラムとしての研修旅行の実施

留学の一手手前として、また広く異文化を体験するための旅行プログラムを望む声が

聞かれた。学生の留学や交流に対するニーズをとりつつ、計画的な「国際化」教育プログラムの確立が望まれる。

##### ③ 全学的な取り組みへ

個人が自由に出かける旅行との違いは意図的な学習としての活動が組み込まれていることと成果を公表することにある。そして大学の「国際化」において重要な活動であることを特に大学内での認知度を高める必要がある。それゆえに大学からの財政的な補助制度や教育活動としての単位化の可能性もあるだろう。今回は国際センターの試行であったが、自ずと学内のどの部局がどのように実施していくのかも明らかにしていかなければならないだろう。

#### むすびにかえて

参加した学生にとって 8 日間の中国訪問と、その準備のための研修はどんな意味があったのだろう。長い人生の中での非常に小さい一つの出来事あるいは、またある人には大きく人生を変えるきっかけとなるのかもしれない。

大きな可能性を秘めた若い世代に対して、その能力を引き出すことが我々大学教員の使命の一つであるとすれば、これからの多文化社会を考えた人材作りの取り組みとして、日本人学生を外国へ送り出し、体験学習によって国際的な感覚を大学時代に培ってもらうことも大切と考える。

筆者の一人である三隅は、4 年前の 3 月初めて武漢を訪れた際、日本語学科の学生 117 名に日本語の授業を行った。学生らの熱心に日本語を学ぶ姿を見、また留学研修等のニーズ調査を行った結果、翌年武漢大学から徳島大学への受け入れ研修を実施した。これは武漢大学の学生の日本語及び日本文化体験の研修であった。そして今回再び訪問研修を実施できた。どれも日本語教育を主軸としたものである。

この間に実際に中国と日本を移動した学生が 35 名、自国で交流会に関わった学生は数え切れない。ほぼ 1 年おきの交流は、1 年生の時に交流会での体験を持ち、3 年生で実際に中国訪問することになったり、またその逆であったりで、先輩から後輩へバトンを次々渡していくように思える。武漢大学そして徳島大学、今回同窓会を通して加わった二つの大学の関係の中でまた脈々と絆ができていく。

大学、また教師、そして学生間の友好関係、すなわち今回の研修の目的である「朋友になろう」の心をいつまでも持ち続け「対話」を礎とした交流プログラムを、学内の連携をとりつつ

実現していきたい。

謝辞 訪問先の武漢大学李国勝先生をはじめとする日本語学科の先生方、本学卒業生の東華大学王蕾先生、上海財経大学の米英麗先生にはスケジュール調整及び本学学生への配慮等本当にお世話になりました。また三大学の日本語学科の学生の皆さんには心からのもてなしをいただきました、関係各位に深く感謝します。

注

- 注1 2008年12月に留学生センターから国際センターに改組となり、従来の留学生教育と日本人学生の留学支援に加えて、大学の国際展開を推進するために各部局と連携した活動さらに地域の国際化支援等の業務を新たに加えた。
- 注2 両研修に関しては参考文献1と2を参照のこと。過去の研修の流れは資料1参照のこと。

注3 国際センターでは美馬市と連携して「まほろば国際プロジェクト」と称する演劇を通したコミュニケーション教育活動を行っている。徳島大学では2006年に実施、美馬市オデオン座では2007年から3年間留学生と地域の日本人で作る演劇をプロジェクトワークとして行っている。これまでと同様に指導を野口三千三体操と竹内敏晴のからだことばのレッスンの専門家に依頼した。身体的コミュニケーションと教育に関しては別稿を準備している。

【参考文献】

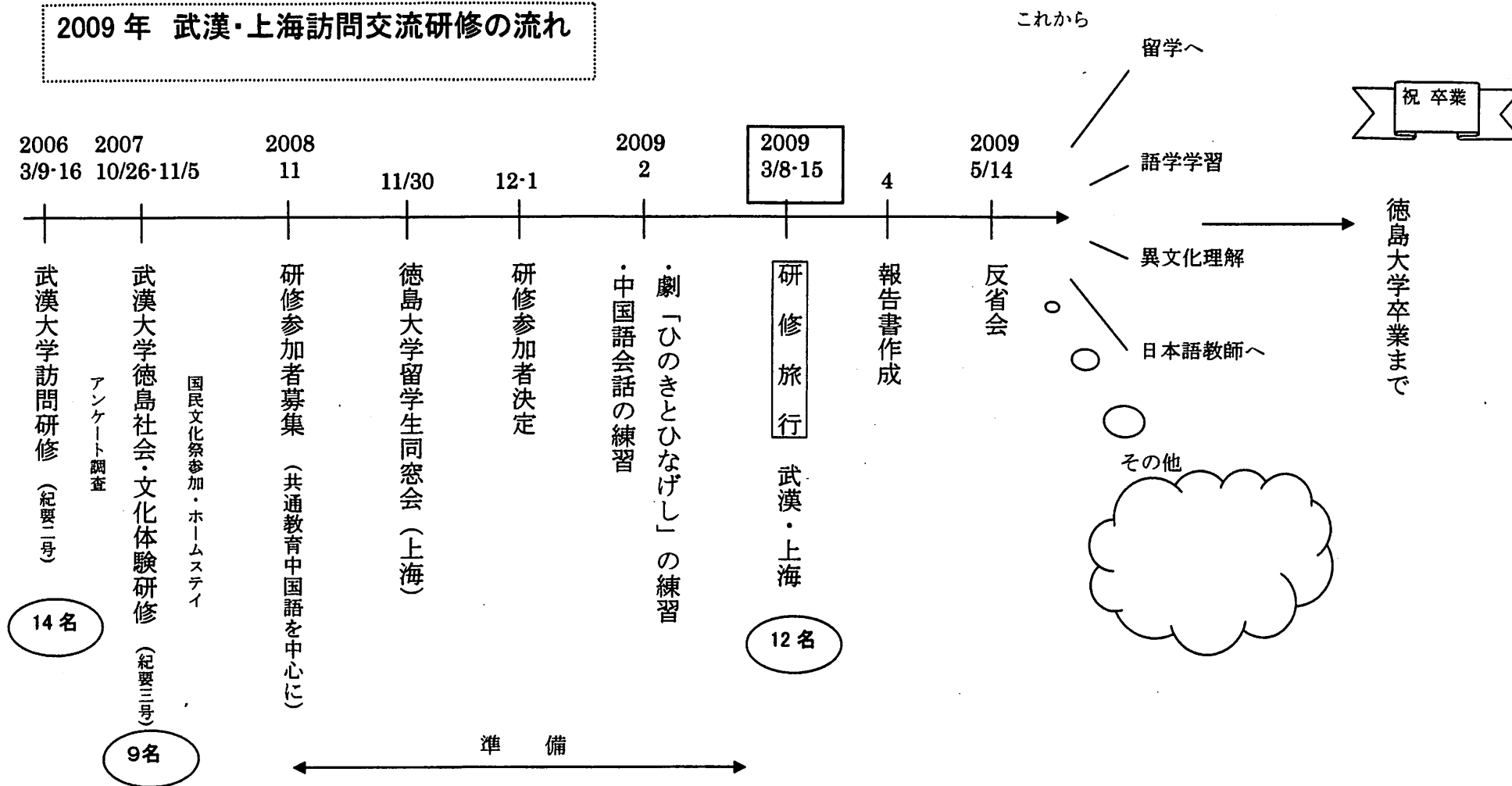
- Gehrtz 三隅友子・曾我部朋子(2006)「日本語教育を通した大学間の協同・連携を考える～2006年武漢大学出張報告～」徳島大学留学生センター紀要第2号,pp31-49
- Gehrtz 三隅友子(2007)「交流と対話を通した大学間の協同・連携を考える～2007年武漢大学徳島社会・文化体験研修～」徳島大学留学生センター紀要第3号,pp49-66



上海財経大学

資料 1

2009 年 武漢・上海訪問交流研修の流れ



## 資料2

### 武漢・上海訪問研修日程

月日	3/8(日)	3/9(月)	3/10(火)	3/11(水)	3/12(木)	3/13(金)	3/14(土)	3/15(日)
午前	徳島 5:05 関空→上海	武漢大学 授業参加	武漢大学 学生交流	最後の会 武漢出発	東華大学 日本語劇	財経大学 交流	上海観光 学生交流	上海 関空
午後	上海→武漢 武漢大学着	交流会 日本語劇		武漢→上海 市内見学		交流会 日本語劇	上海博物館等 学生交流	関空着 徳島へ
夜	歓迎会 武漢泊	武漢泊	武漢泊	上海見学 上海泊	豫園 上海泊	雑技団見学 上海泊	豫園 上海泊	

## 資料3

### 交流会の感想 上海財経大学 日本語学科の学生から

#### <一年生①>

先しゆうの交流会は私はたいへんたのしかったです。その日本の大学生はとても親切な人ですが、私達はたくさん話しました。彼女たちは私たちにお土産をくれました。私達は「時の流れに身をまかせ」という歌を歌いました。彼らは「友達」を歌いました。そして彼女たちの中国語の発音は綺麗です。時間は限られていましたが、大変楽しかったです！日本の大学生はとてもフレンドリーでした。私は参加させていただき、非常にうれしく思いますが、日本の大学生の友達と交流するチャンスを期待しています。よろしくお願いします！

#### <一年生②>

日本の徳島大学の先生と学生たちは先週の金曜日に、私たちの上海経済大学に来てくださいました。その日寒かったうえに、雨が降っていました。日本の皆様はとても薄着で、心配しました。午後三時ごろ、私たちは一緒にパーティーを開きました。日本の学生はいろいろな出し物、たとえば合唱、芝居を演じました。芝居は、川の俳優は椅子の上に立っていました、とても高いツリでしたね。日本の皆様は中国語の歌「友達」を歌ました。発音はきれいでした。私たちも歌を歌いました。私はピアノを弾いて、曹さんは二胡で、沈さんは日本語の歌「始まりの風」を歌いました、みんなは拍手して私たちを励ました。楽しかった金曜日でした。私は日本のお菓子が食べられ、新しい友達に出会うことができました。私も将来日本へ行きたいと思いました。

#### <一年生③>

先週は、金曜日に日本の友達がきました。あの日は、雨がふっていましたから、とても寒かったです。それでも、皆は楽しかったです。午後一時ごろ私たちは教室へ行きました。日本の先生と学生はもう教室にいました。先生たちの挨拶がおわって、交流会に入りました。日本からの学生と話をしました。日本語はあまり上手ではありませんでしたので、なかなか通じませんでした。でも、面白かったです。三時ごろ、パーティーが始まりました。日本の学生は芝居して、その内容は私たち一年生には難しかったです。それから、私たち三人は、ピアノと二胡をして、歌を歌いました。皆は楽しかったです。五時ごろ、パーティーが終わりました、少疲れましたが、しかし、楽しかったです。

#### <一年生④>

徳島大学の学生はとても親切な人で、いろいろなプレゼントとお菓子と名刺をくれました。彼らの合唱や踊りやコントなどは本当に素晴らしかったです。とても賑やかなパーティーでした。私は日本語があまり上手ではありませんでしたので、自分の言いたいことをよく伝えることができなかったと思います。今度の交流会は本場の日本語に触れることができました。そして、日本人の意外な一面を知ることができました。日本の大学生と友達になりました。とても楽しかったです！日本へ行きたくなりました。

#### <一年生⑤>

先週の金曜日、徳島大学の学生たちといろいろ交流したので、楽しい時間を過ごすことができました。徳島大学の学生たちはすばらしいパフォーマンスをしてくださいました。私の日本語はあまり上手ではなかったので、その芝居の内容が理解できなかったです。残念でした。でも、彼らの努力の姿を見て、感心しました！私も歌を一曲歌いました。あまり準備できなかったのですが、ちょっと間違えたところもありましたが、気持ちだけ伝えれば良いとおもいました。一番うれしいのは、新しい友達に出会えたこと



です。みんなとても親切な人で、すぐ友達になりました。いろいろ歓談しましたので、時間も忘れました。二人の友達にメールを送りました。今はもう返事をもらいました。

今回の交流会は本当に素晴らしいものだと思います！またチャンスがあれば、ぜひ参加したいです。

#### <四年生⑥>

徳島大学の学生と一緒に楽しい二日間を過ごしました。最初に会ったのは△さんです。彼女の手作りの名刺が印象的です。後は、○さんなどと話をしました。彼女たちが優しくて、いろいろな日本語を教えてくださいました。ここと違うのは皆面白いバイトをしています。今度、留学生ではなくて、日本の大学の大学生と付きあって、彼らを前より良く分かるようになった。今度、こういうチャンスを望みます。

#### <三年生⑦> より深い絆になろう

徳島大学から一行十四名は上海財経大学においでくださって、本当に有難いものだと思える。今回の交流会は素晴らしい経験だったと思う。それによって、双方の学生が知り合って、友人になってしまったのはおめでたいことではないか。徳島側の学生は自己紹介の場合、中国語でしたのにととても感心した。中国語が上手かどうかはともかく、そういう勇気だけが褒められたはずだ。いろいろと話した後、日本側の学生は普通自分の趣味に従って専攻を選ぶのがわかった。そういう現象は中国で少ないだろうと思う。その点だけから日本側の大学生は考え方はもっと開放的だと意識してきた。また、徳島側の大学生が好奇心と勉強好きなどは深い印象に残った。彼女らは中国語の勉強に熱心らしいと思っていた。交流会の場合にしても、食事の時にしても、買い物に至ったところにしても、できるだけ中国語で私たちと交流したことは思わなかった。彼女たちが中国の様々なことに興味を持つような気がした。これから日本側の学生と同じように精いっぱい日本語を勉強して日本のことにもっと詳しくなるように頑張っていく決意がある。そうすると、私の日本語がどんだんうまくなるわけではないだろうと思っている。徳島側の学生もお願いが叶うことと確信している。もしチャンスがあったら、また見学旅行を通じて、上海財経大学と徳島大学との交流を深めていきたいと思う。一緒により深い絆を結ぶように頑張っていこう。